

平成25年度文部科学省スポーツ・青少年局
「青少年教育施設における国際交流事業」



東アジア教員養成国際コンソーシアム加盟校 大学生招聘交流事業



実施主体：東京学芸大学・国際戦略推進本部

東アジア教員養成国際コンソーシアム事業実施部会

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

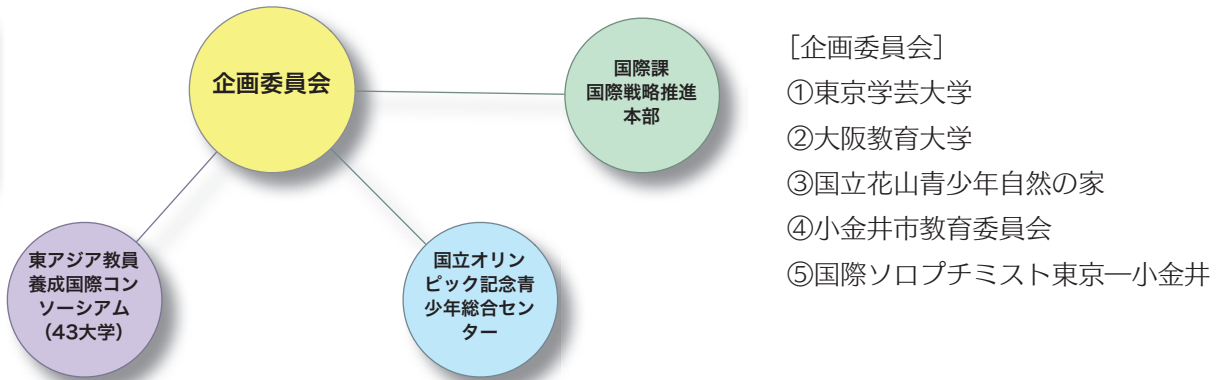
電話：042-329-7774 E-mail:opis-tgu@u-gakugei.ac.jp

URL:<http://www.u-gakugei.ac.jp/~icue2009/>

東アジア教員養成国際コンソーシアム加盟校大学生招聘交流事業の概要

東アジア教員養成国際コンソーシアム加盟校大学生招聘交流事業 ～東日本大震災被災地の教育支援ボランティア～

組織



海外の青少年 中国・韓国 30名

事業の目的

[海外の青少年の日本に対する理解を増進すること]

- ①被害の甚大さと力強い復興の歩みについて学ぶ
- ②自然・文化体験を通じて、日本理解を深める
- ③被災地児童に対する教育ボランティアを体験する
- ④日中韓の青少年の新たなネットワークを構築する

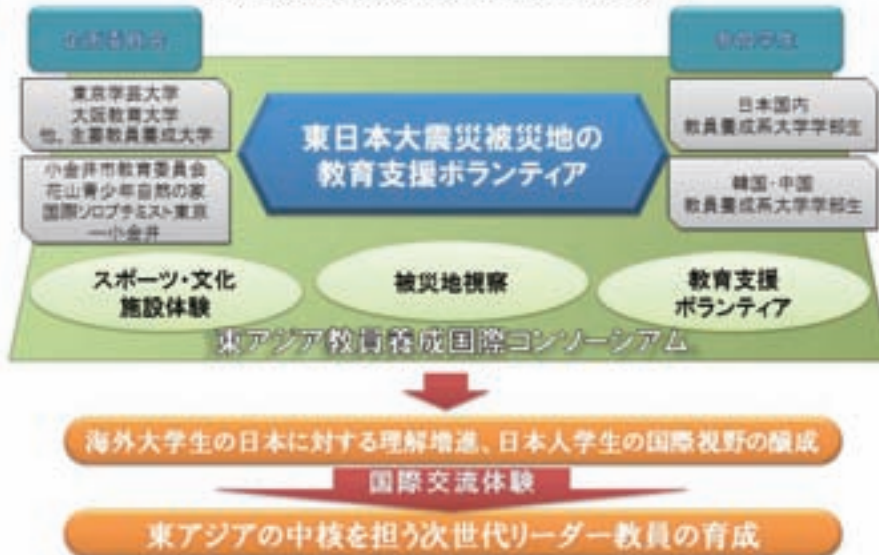
国内の青少年 日本 43名

事業の目的

[日本の青少年の国際的視野の醸成に関すること]

- ①教員養成系学生が国際的視野を広げる機会を持つ
- ②学校教育の課題を東アジア地域と共有する
- ③被災地児童に対する教育ボランティアを体験する
- ④東日本大震災の経験を東アジアスケールで考える

東アジア教員養成国際コンソーシアム加盟校大学生招聘交流事業 ～東日本大震災被災地の教育支援ボランティア～



プログラムについて

1. 目的：本事業は東アジアの教員養成系大学に在学する大学生が東日本大震災の被災地を訪問し、ボランティアや教育支援に携わることにより東アジアの大学生間の交流を促進するとともに、大震災の経験を海外へ伝える取組みとする。
2. 特徴：東京学芸大学に事務局を置く東アジア教員養成国際コンソーシアムには東アジア地域（中国・台湾・香港・韓国・日本）43の教員養成系大学が加盟している。このネットワークを基礎に、青少年教育施設を活用した自然体験、交流体験プログラムを実施する。

招聘事業「東日本大震災の教育支援ボランティアと東北の自然文化体験」
 国立オリンピック記念青少年総合センター・国立花山青少年自然の家

2013年度 研修日程 (①は第1回、②は第2回)

日目	日程	活動内容	宿泊先
1日目	①10月8日(火) ②10月19日(土)	到着日 オリエンテーション、班ごとの打ち合わせ	国立オリンピック記念青少年総合センター
2日目	①10月9日(水) ②10月20日(日)	午前：東日本大震災に関する講演 午後：日本文化体験、班ごとの打ち合わせ	国立オリンピック記念青少年総合センター
3日目	①10月10日(木) ②10月21日(月)	午前：花山に向けて出発 午後：オリエンテーション、ウェルカムパーティ	国立花山青少年自然の家
4日目	①10月11日(金) ②10月22日(火)	① 登米小学校・登米中学校訪問 午前：授業参観、施設見学、校長講話 午後：教育資料館参観 ② 石巻市・女川町訪問 午前：門脇小学校(旧)、女川町訪問 午後：石巻専修大学山崎ゼミにおける活動	国立花山青少年自然の家 
5日目	①10月12日(土) ②10月23日(水)	① 石巻市・女川町訪問 午前：門脇小学校(旧)、女川町訪問 午後：仮設住宅住民とのお茶会 ② 一迫小学校、鶯沢小学校、栗原西中学校、栗駒中学校訪問 午前・午後：授業参観、施設見学、校長講話	国立花山青少年自然の家 
6日目	①10月13日(日) ②10月24日(木)	防災キャンプ 午前：焼き板作り①、野外炊飯 午後：テント張り、東日本大震災に関する講義・DVD鑑賞 夜：焼き板作り②	国立花山青少年自然の家
7日目	①10月14日(月) ②10月25日(金)	総括発表に向けた準備	国立花山青少年自然の家
8日目	①10月15日(火) ②10月26日(土)	午前：花山からオリセンへ 午後：総括報告、フェアウェルパーティ	国立オリンピック記念青少年総合センター
9日目	①10月16日(水) ②10月27日(日)	解散・帰国	



【教育資料館・登米】



【班ごと打ち合わせ・花山】



【野外炊飯】

プログラムの特徴、参加者の声

1. 招聘者に対するプログラムの特徴

(1) 被害の甚大さと力強い復興の歩みについて学ぶ

東アジア地域の大学生は大震災の様子を映像でのみ体験した。2011年3月11日、国際放送としてはまれにみる特集を中国・台湾・韓国のテレビ局は組んでおり、その衝撃的な映像は海外の学生の胸にも刻み込まれた。本プログラムでは、そうした映像のみの情報を生の体験に転換する試みとして、石巻・女川を实地踏査し、仮設住宅訪問や支援団体との連携により、被災の実態と力強い復興の歩みについて理解を深めた。

(2) 自然・文化体験を通じて、日本理解を深める

国際ソロプチミスト東京一小金井の全面的な支援により、国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、日本文化体験としてお茶の歴史や礼儀作法について学ぶとともに抹茶を堪能した。また緑あふれる国立花山青少年自然の家において、防災キャンプや焼き板づくり、野外炊飯を体験した。

(3) 日中韓の青少年の新たなネットワークを構築する

参加学生は第1回・第2回ともに日中韓混成の10名1班で4班を構成し、各班は各種活動や毎晩の振り返り学習などを通じて友好を深めた。帰国後もSNSなどを活用して、交流を継続している。



【日本文化体験・茶会】



【防災キャンプ・花山】



【被災地視察・女川】

2. 日本人参加者に対するプログラムの特徴

(1) 教員養成系学生が国際的視野を広げる機会を持つ

今回参加の日本人学生は英語を使用する場面に直面し、苦勞しながら中国・韓国の学生とコミュニケーションをはかる中で、隣国の学生の温かさに触れた。また日本人学生は英語が堪能な中国・韓国の学生に敬意を感じつつ、語学力向上に向けた決意を新たにした。

(2) 被災地児童に対する教育ボランティアを体験する

第1回の学生は2班に分かれ、登米市立登米小学校・登米中学校を訪問し、授業を参観するとともに、校長先生の講話に耳を傾け、児童・生徒と一緒に給食を楽しんだ。第2回の学生は4班に分かれ、栗原市立一迫小学校・鶯沢小学校・栗原西中学校・栗駒中学校を訪問した。各学校では授業参観・施設見学のほか、英語・数学の授業の補助や相撲の実演、合唱の披露など体験し、積極的に教育活動に参加した。



【自然文化体験・焼き板づくり】



【英語授業に参加・栗原】



【住民との交流・石巻】

(3) 東日本大震災の経験を東アジアスケールで考える

各回の参加学生は2日目に東京学芸大学の鴨川仁助教による講演「防災セミナー—地震と津波のメカニズムを知る」を聴講し、東日本大震災のメカニズムを科学的に分析し、防災に活かす視座を獲得した。花山では久光新一専門職によるDVD上映と被災体験の講話からメディアで報道されない現実を目の当たりにした。石巻専修大学では山崎泰央教授のゼミ学生と交流し、同ゼミの進める社会支援と教育支援の経験を共有した。私たちは被災者が精神的に自立してこそ真の「復興」といえることを学んだ。



【防災セミナー・鴨川助教】



【被災体験・久光専門職】



【学生との交流・石巻専修大学】

3. 参加者の声

〈日本人参加者〉

- ・ 街は一見きれいになおっているところがほとんどだったが、今も津波の爪痕が残されている所もあった。実際に見て初めて分かった復興の進んでいない本当の現状に、私たちは言葉を失った。
- ・ このボランティアを経験して最も自分のなかに残っていることは、“自助”の意識である。それは自分で考え、自分で行動することであり、訪問した学校の教頭先生の講話から学んだ。将来教師になったとき、このことに関して、自信をもって子どもたちに伝えていきたい。
- ・ 被災地にとって今本当に必要なのは教育支援であり、被災地の未来を担う子どもたちのために、これからの教育について考えなければならない。
- ・ 中国や韓国に対する考え方が良くなった。今まで行きたいと思わなかった中国・韓国に心の底から行きたくなった。やはり、直接言葉を交わさなければ分からないことだらけだ。

〈中国人参加者〉

- ・ 心が一番打たれたのは、震災から生み出された人々の絆だった。人とのふれあいの大切さが震災を通して再認識でき、石巻市・東北地方だけではなく、日本全国中に目に見えない、強い絆ができた。
- ・ 短い九日間、私は深く日本人の考え方や行動を学んだ。日本人は相手の立場や観点を考慮してから行動する。「思いやり」は以心伝心の精神であり、それは「最も美しい日本語」であると思う。
- ・ かつて心の中で排斥してきた日本、南京出身の私の考えは大きく変わった。清潔、秩序、まごころ、忍耐強さ、いずれも深い印象を残した。

〈韓国人参加者〉

- ・ 学校の掲示板で日本奉仕活動募集を見た瞬間、私は学生事務局に電話をしていた。大地震地域の奉仕活動だから当然危険なはずなのに、自分も知らなかった日本を知りたい、行きたいという情熱が心の奥深くから燃え上がってきた。私は運命のように日本に引き寄せられた。
- ・ 何より日本での奉仕活動は「一步を踏み出す前の深呼吸」を学ぶことのできる時間でした。心で触れ合う教育は失敗しないといえます。ここで学んだ教育のための「深呼吸」を、教師になってから子供たちが踏み出す教育の「一步」に力を添えてあげたいと思います。

成果発表会(第1回)



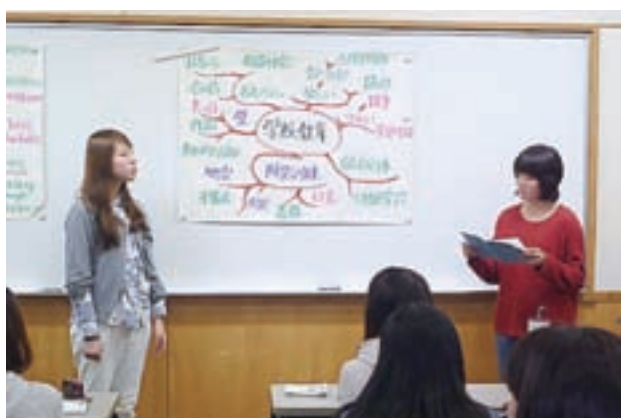
【1班】



【2班】

【1班】私たちが伝えなければならないことは何だろう。それは災害の実態であり、防災であり、自分自身の生活の大切さである。そのことを子どもたちにどのように伝えるべきか。間接的にはビデオやDVDの上映があり、直接には防災キャンプへの参加など考えられる。近年韓国で進められているSTEAM(科学・技術・工学・芸術・数学)教育という融合教育の方法の活用も有効である。

【2班】被災地の人々は依然悲しい記憶と闘っている。私たちができることは、おそらく彼らとおしゃべりをしたり、歌を歌ったりすることだ。3.11は彼らの権利を奪った。私たちはそのことにショックを受けた。私たちは忙しい日々の中で、家族との時間を十分に持てないでいる。私たちはもっと家族のための時間を費やさなければならない。そして、もっと家族を大切にしなければならない。



【3班】



【4班】

【3班】学校教育をテーマにマインドマップを作ってみる。学校では競争や学習などつらいことがあるとはいえ、部活動を通して築かれた人間関係や協力は楽しさを感じさせてくれる。学校の真っ白な壁には作品が飾られ、文化活動が花開く。仮設住宅の人びとのお茶会では、合唱が披露され、日本人のおもてなしの心を伝える。学校教育の現場では地震や火災、不審者などに備えて防災訓練をおこなっている。

【4班】地震への備えを日中比較で検討する。日本の政府は非常食の準備や耐震工事、ハザードマップの配布、防災教育の義務化など考えてほしい。中国の政府には住居の改築や事前警報システムの強化、科学研究の推進などが求められる。日本の学校では形式化した防災訓練を見直し、防災に関する特別講義も必要である。中国の学校では防災に関するDVDの上映や専門課程の開設、防災訓練を実施すべきである。

成果発表会(第2回)



【1班】



【2班】

【1班】学校現場で防災教育をどのように進めるか。1班は「おかしも」を提案する。お：おさない、か：かけない、し：しゃべらない、も：もどらない、である。災害前の防災教育が教師の役割としてもっとも重要である。日本は地震国であり、防災の進め方が課題であるが、韓国では地震が少なくリアリティがもてないという問題があり、中国は防災に対する知識や技術を欠くという課題がある。

【2班】私たちは被災された24名に①将来どのようになりたいか、②どのように①を手に入れるか、という二つの質問調査をおこなった。結果は、社会支援は自立をもって終了するが、そのことは教育支援の終わりを意味しない、という視点である。地震は社会と教育の問題に焦点をあてる機会となった。「地震」とは単に災害であるばかりでなく、よりよい暮らしへの「ターニングポイント」にすることができる。



【3班】



【4班】

【3班】子どもの命を守ること、教育においてこれが一番大事なことである。防災教育の目的は心構えを育て、自助の精神を養い、判断力を鍛えることである。私たちは災害に対する警戒を維持し、つながりを大切にしなければならない。災害において情報をどのように集め伝えるか、学校と地域社会の相互協力をどのように構築するか今後の課題である。子どもたちの生命を守ること、それは教師の良心である。

【4班】被災した子どもの心のケアは長い時間、継続的に支援されるべきである。子どもたちは遊び場を失い、外遊びもできず、ストレスを抱えている。石巻専修大学山崎ゼミのプレイパークや子どものまち、3.11プロジェクトは教育支援・社会支援の好例である。子どもたちは東日本大震災によって大きな困難とストレスに直面したが、これはまた発展と成長の機会でもある。

北京派遣

1. 日本人参加者に対するプログラムの特徴

(1) 教員養成系学生が国際的視野を広げる機会を持つ

	日程	活動内容	宿泊先
1日目	12月9日(月)	出発日 出国(羽田空港→北京首都空港) 午後:万里の長城(居庸関) 夕方:ウェルカムパーティ	京師大廈(北京師範大学 学術交流中心)
2日目	12月10日(火)	地震と防災に関する講義 午前:方偉華副教授(北京師範大学) 中国の大地震と防災に関する講義 午後:校史博物館・文物博物館、中国 文化体験(太極拳)	京師大廈 
3日目	12月11日(水)	唐山大地震調査 午前:河北省唐山市訪問 午後:唐山抗震紀念館(地震博物館)参観	京師大廈
4日目	12月12日(木)	中国文化体験 日中:自主研修(天壇公園、故宮博物院・ 景山公園など参観) 夜間:中国文化体験・京劇鑑賞(梨園 劇場)	京師大廈 
5日目	12月13日(金)	附属小学校訪問 午前:北京師範大学附属小学校訪問、 授業参観、施設見学 午後:鳥巢(北京オリンピック・国家 スタジアム)参観 夕方:フェアウェルパーティ	京師大廈
6日目	12月14日(土)	帰国日 帰国(北京首都空港→羽田空港)	

2回に分けて実施された国内事業の参加者、73名のうち、国内の参加2大学(東京学芸大学、大阪教育大学)から10名の参加者を募り、国際的視野を広げる機会として北京派遣を実施した。北京では①地震と防災の比較研究、②学校教育の現場体験、③中国の自然・文化体験に重点を置いた。

(2) 学校教育の課題を東アジア地域と共有する

北京では、北京師範大学附属小学校を訪問、書道の授業を参観し、授業担当の教員と意見交換をおこなった。また施設を見学し、黒板の使い方や体操の時間の設定など、学校文化の違いに触れた。



【万里の長城・居庸関】



【中国文化体験・太極拳】



【中国文化体験・京劇】

(3) 東日本大震災の経験を東アジアスケールで考える

中国もまた地震国であり、2008年の汶川地震は四川大地震とも呼ばれ、記憶に新しい。昨年も同じ四川省の雅安市において大きな地震があった。本事業では1976年に20万人を超える被害のあった河北省唐山市の唐山大地震に関する理解を深めることを目的に、事前に北京師範大学の地震・防災の専門家に講義を依頼し、実地踏査をおこなうこととした。これにより、東日本大震災の経験（被災の実態と復興、防災教育など）を東アジアの中で考えることが可能となった。



【地震・防災に関する講義】



【唐山地震博物館】



【北京師範大学附属小学校】

2. 参加者の声

- ・北京師範大学では方先生の専門である災害軽減と危機管理に関するADREMの取組みについてお話を伺った後、先生が中国の小中学校に向けて配った震災に関する教科書を作るまでのお話を伺った。中国では防災に関する授業がとても少ないため、家庭で保護者とともに学習できるよう教科書を作ったという。文字での説明に加えてカラーの絵がたくさん入っていてわかりやすい教材だと思った。
- ・大気汚染も心配していたが思っていたよりも快晴でこの調子ならマスクもなくてよさそうだ。上級者向けの万里の長城ではコートの下に汗をだらだら流したが、一番高い塔から見た景色は夕焼けの白雲と山の淡い輪郭が混ざり合って「太美了(美しい)」。私の初めての中国語は「辛苦了(お疲れ様)」だった。
- ・唐山では震災前は工業・農業などさまざまな産業が行われており、広い範囲にたくさんの家が立ち並んでいた。地震発生は午前4時前。多くの人が眠っていた時に起きたことが24万人以上という犠牲者を出した一つの要因であると思った。博物館の展示は復興に重点を置いているのが特徴的だった。
- ・五日目は北京師範大学の附属小学校を訪れた。書道の授業では、挙手をする子供が多いのが印象に残った。(私たち見学者がいたために張り切ったというのもあるかと思うが。)また先生の授業もICTを用いた先進的なものであるように思った。中国の教育現場を見る機会が得られて大変良かった。

企画委員会開催による事業の質向上に向けた取り組み

- 企画委員より国内招聘事業について小中学校訪問日の夕方にも振り返りの時間を設けるよう提案をいただき、日程表に反映することができた。学校訪問日を2日間設けるという提言には応えきれなかったが、訪問先の小中学校は独自に受入れの計画を作成して下さり、充実した教育支援ボランティアとなった。
- バスでの移動時間を有効に活用すること、また初めて出会うメンバー同士が仲良くなれるような工夫を行うよう意見をいただいた。これに対し、自己紹介コーナーや日本文化を紹介する映像を用意するなどしてバスの時間を楽しく、良好な関係を築く時間にするのができた。
- 企画委員会構成団体と関連団体のメンバーは、プログラム実施期間や総括報告会で講義やコメントを提供することにより、参加者の満足度も大きく、かつ質の高い事業となった。



勝山浩司理事・副学長から北京師範大学の陳光巨副学長へのお礼

調査について

日本人参加大学生 43名、招聘大学生 25名（中国 20名・韓国 5名）及び日本国内に留学している学生 5名（中国 4名・韓国 1名）計 73名に対して、以下質問項目を利用し調査を行った。

参加者に対しては、事業開始時及び事業終了時に同じ調査項目を用いて調査を実施した。集計・分析は、各得点の平均と標準偏差を算出した。また、参加者の事業前・後の結果の差を見るため、「対応あるサンプルのt検定」で分析した。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション力・指導力・協調性・責任感

要素Ⅱ：チャレンジ精神・自主性

要素Ⅲ：異文化理解・自文化理解

要素Ⅳ：教員関係（教員への志望、目的の明確化）

要素Ⅴ：課題達成力・集団維持機能・情報管理機能

	要素	質問項目
1	要素Ⅰ 語学力・コミュニケーション力・指導力・協調性・責任感	1 本国語以外で自己紹介ができる
2		2 外国の人に本国語以外で話しかけることができる
3		3 将来海外の学校で学びたい
4		4 将来海外で働きたい
5		5 だれにでも話しかけることができる
6		6 人の話をきちんと聞くことができる
7		7 人のために何かをしてあげるのが好きだ
8		8 人の心の痛みがわかる
9		9 児童・生徒が望んでいることを理解できる
10		10 児童・生徒と会話をすることができる
11		11 教師の仕事や役割を把握している
12		12 学校行事に積極的に参加することができる
13		13 だれとでも仲良くできる
14		14 その場にふさわしい行動ができる
15		15 自分かってな、わがままを言わない
16		16 チームで作業ができる
17		17 いやがらずに、よく働く
18		18 自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる
19		19 自分がすべき役割をはっきりわかっている
20	要素Ⅱ チャレンジ精神・自主性	20 日本人として（中国人・韓国人として）世界に貢献したい
21		21 小さな失敗をおそれない
22		22 うまくいくようにいろいろな工夫することができる
23		23 新しいことに挑戦したい
24		24 ゼロから企画し実行できる
25		25 自分からすすんで何でもやる
26		26 前むきに、物事を考えられる
27		27 先を見通して、自分で計画が立てられる
28		28 わからないことは自分で調べることができる

	要素	質問項目
29	要素Ⅲ 異文化理解・自文化理解	29 交流国の文化（日常生活等）を理解している
30		30 交流国の歴史を理解している
31		31 初めての環境に自分からなじもうと努力する
32		32 言語教育と異文化理解の関係を考えられる
33		33 自国の文化（日常生活等）を説明することができる
34		34 自国の歴史を説明することができる
35		35 自国のよさを説明できる
36		36 自国の芸術やスポーツに興味をもっている
37	要素Ⅳ 教員関係（教員への志望、目的の明確化）	37 教えることにやりがいを感じる
38		38 理想の教師像をもっている
39		39 専門教科を深めたい
40		40 子どもとともに成長したい
41	要素Ⅴ 課題達成力・集団維持機能・情報管理機能	41 物事をいろいろな方向から見ることができる
42		42 すずんで手助けや勉強をすることができる
43		43 危ないことを予測して避けることができる
44		44 反省したことを次の行動や活動に活かしている
45		45 全体の目標にあわせて活動に取り組んでいる
46		46 ルールや約束を必ず守ることができる
47		47 親や先生に言われなくても規則にしたがうことができる
48		48 困っている友達がいたら励ますことができる
49		49 必要な情報を適切な情報源から得ることができる
50		50 さまざまな情報を取捨選択し編集することができる
51		51 自分の持つ情報を適切に周りと共有できる
52		52 情報処理能力の向上に努めることができる
	外向き志向	日本人として世界に貢献したい
		外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたい
		交流した外国の人と将来も繋がりをもちたい

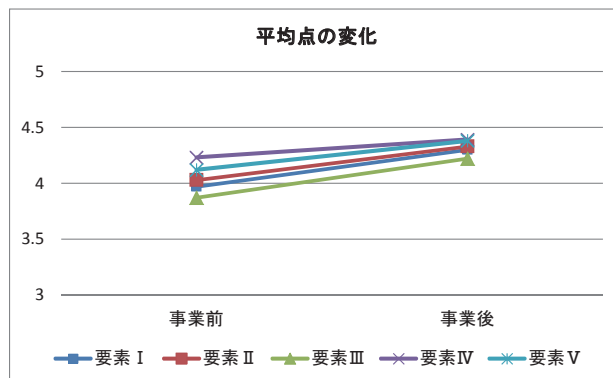
調査結果

1. 招聘者（留学生含む）に対する調査

[招聘者] 各要素の変化

	平均点				
	事業前	事業後	変化		
要素Ⅰ	3.97	4.30	0.33	*	平均値が向上 (有意な差)
要素Ⅱ	4.03	4.33	0.30	*	平均値が向上 (有意な差)
要素Ⅲ	3.87	4.22	0.35	*	平均値が向上 (有意な差)
要素Ⅳ	4.23	4.39	0.16	*	平均値が向上 (有意な差)
要素Ⅴ	4.12	4.38	0.26	*	平均値が向上 (有意な差)

※ $p < 0.05$

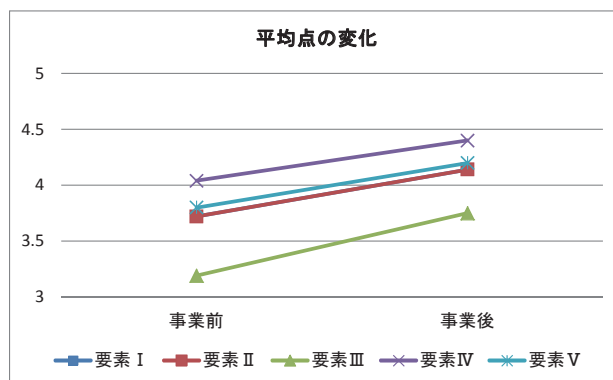


2. 日本人に対する調査

[日本人] 各要素の変化

	平均点				
	事業前	事業後	変化		
要素Ⅰ	3.72	4.14	0.42	*	平均値が向上 (有意な差)
要素Ⅱ	3.72	4.14	0.42	*	平均値が向上 (有意な差)
要素Ⅲ	3.19	3.75	0.56	*	平均値が向上 (有意な差)
要素Ⅳ	4.04	4.40	0.36	*	平均値が向上 (有意な差)
要素Ⅴ	3.80	4.20	0.40	*	平均値が向上 (有意な差)

※ $p < 0.05$



招聘大学生及び日本人参加者に対する調査では、全ての要素において統計学的に有意な得点の向上が見られた。中でも双方とも伸びが大きかったのは要素Ⅲ「異文化理解・自文化理解」の項目であった。

日本人参加者は招聘大学生と比較し、事業前の点数が低い傾向が見られたが、事業後の点数の変化では全ての要素において招聘大学生を上回る向上がみられた。

今回のアンケート結果にも見られる通り、本事業参加の学生は外向き志向を強めた。とりわけ日本人学生は外国語学習への意欲を高めた。日本人の参加者は学部1・2年生が多く、その後の大学生活に与える影響は計り知れない。教員養成の国際化が叫ばれる中、本プログラムは一つの交流モデルを示している。

日本・中国・韓国は近年政治的には厳しい関係にあるとはいえ、今回参加の日中韓の学生73名は強い絆で結ばれた。私たちはこうした若者の交流が次の時代の平和と友好の礎となることを願っており、次年度以降もプログラムの質の向上に努めつつ継続的に事業を進めていきたいと考えている。(下田誠)

